

Title	アラン&イザベラ・リヴィングストン著藪亨+渡邊眞訳 『グラフィック・デザイン&デザイナー事典』
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 47 P.136-P.137
Issue Date	2005-11-12
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/52964
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アラン&イザベラ・リビングストーン著 藪 亨+渡邊眞 訳

『グラフィック・デザイン&デザイナー事典』

晃洋書房 2005年5月10日初版代刷発行

谷本尚子

本書の概要

日々拡張する今日のグラフィック・デザインの領域から「本質的で」、「必要で」、「重要な」項目を選ぶためには、どれほどの書物を読まなければならないのだろうか。

『グラフィック・デザイン&デザイナー事典 “The Thames & Hudson Dictionary of Graphic Design and designers” (Thames & Hudson, London, 1992, 1998, New edition 2003)』の著者は、1840年代から今日までのグラフィック・デザインに関するすべてを網羅しようとする。標準用紙寸法のABCシステムからバーコードまで、オーウェン・ジョーンズから「デザイナーズ・リパブリック社 (1980年代後半以降のクラブ・シーンや音楽界のビジュアル・イメージに影響を与えた)」まで。個人のデザイナーからデザイン雑誌、技術的展開、専門用語、著名なデザイン・スタジオまでABC順に並べられた項目は、750に及ぶ。これだけ広範囲な内容をA5版286ページのコンパクトな一般書として計画する試みは、これまでなかったように思われる。

本文の事典の前には、主題別欧文索引がつけられ、次のように分類されている。

1. アート・ディレクター
2. デザイン・スタジオ/広告代理店
3. グラフィック・アーティスト/挿絵画家
4. グラフィック・デザイナー/タイポグラファー
5. 雑誌
6. 運動/様式

7. 各国概要
8. 組織/協会/学校
9. その他の重要人物
10. ポスター作家
11. 印刷家/プライベート・プレス/出版社
12. 専門知識
13. 書体デザイナー
14. 書体

これらの内容は、的確な記述と58枚のカラー図版を含む504枚の図版によって、学生にとっての手引きとなるだけでなく、デザインの専門家にとっても楽しく、便利な概説本となっている。

さらに著者は、広範囲な項目を取り上げることで、「グラフィック・デザイン史と美術史や挿絵史との関連性を明らかにし」、「グラフィック・デザインが過去160年間の芸術の発展においてその周辺ではなくその核心にいかんにか位置していたか」を明らかにしたいと述べている(凡例, p.14)。これと関連して、美術・デザイン運動と影響力のあったデザイナー、グラフィック・デザインの発展に関連する事項をあげた年表が付されている(pp.266-269)。この年表をみれば、著者が本書を執筆するにあたり、デザインの現実的な展開を十分に考慮していることがわかる。

著者のひとり Alan Livingston は、現在英国のコーンウォール州にあるフォールマウス美術大学の学長であるが、グラフィック・デザイナーになる教育を受けており、もうひとりの著者 Isabella Livingston は同大学でデザイン史を教えている。デザイナーとデザ

イン史家の共同作業が、本書の包括的な内容を可能にしたのだろう。

デザイン史を省みて

著者はイギリス人であるが、グラフィック・デザインの展開を包括的にとらえるという目的から、幾分限定的ではあれ、本書は国際的な広がりをもっている。ここでは、アメリカ、イギリス、オランダ、フランス、ドイツ、日本、スイスの7カ国について、20世紀初頭から1960年代以降、そして現在までの各国ごとの展開が取り上げられている。

アメリカについては植字機械の発展に伴う19世紀の展開とそのアーツ・アンド・クラフツの影響に始まり、第二次世界大戦前後のモホリ=ナギやハーバート・パイヤーといった欧州デザイナーの流入、40年代から50年代にかけての美術とデザイン実践の結びつきと広告業界の拡張、1960年代のカラー・テレビの登場に伴うサイケデリックなイメージの台頭、さらにポスト・モダニズムの探求までが取り上げられている。

オランダのグラフィック・デザインについては、ピート・ズワルト、パウル・シュイッテマらのデ・ステイルの実践家やデ・ステイルと構成主義の双方の原理を取り入れたヘンドリック・ウェルクマンらを取り上げた後、1960年代に組織され、1970-80年代には郵政省のCIを手がけたトータル・デザイン社の貢献について触れている。

日本のグラフィック・デザインにおける現代的な動向は、1940年代の後半に始まるとされる。1950年代の亀倉雄策が尽力した日本宣伝美術会の設立、及び勝見勝によって創刊された『アイデア』誌が取り上げられ、1960年代には世界に衝撃を与えたデザイナーとして、田中一光、福田繁雄、栗津潔、横尾忠則、石岡瑛子の名前があげられている。さらに1980

年代の若いデザイナーとして、上條喬久、五十嵐威暢の名前が記されているのは、タイポグラフィ協会との関連があるのだろうか。

こうして概観すると、西洋デザインの通史とは異なる20世紀のグラフィック・デザインの展開が浮かび上がってくるように思われる。事典という特色を生かし、通史としての物語に囚われないアイデアが生かされているということもできるだろう。

本書は2003年に40項目を増やした改訂版として出版されたものを全訳したものである。手元に置いて、パラパラと斜め読みをしながらデザイン史を省みようと思う。

